

## 岐阜農林高校

# 「櫛」

2018. 12. 25 上演3

この物語は、年々衰退し、農業の担い手も不足してきている「未来のない町」上泊を舞台に、本当は進学を希望していたが、母親の死によって「未来のない町」の温泉旅館をどちらかが継ぐことになった双子の姉妹「あまね」と「はるね」の互いを思いやる心を中心に展開する。未曾有の集中豪雨と鉄砲水により農場が襲われるなか、伝統的に櫛の代わりに大根を持って走る「上泊駅伝」の続行に奮闘する高校生達の地元愛を表現した作品である。大勢の部員による鮮やかで迅速な場面転換や、音を全員で表現するコンビネーション力に衝撃を受け、圧倒された。

駅伝の実況アナウンサーを追うピンスポットライトのなめらかな動きと、横からの照明が住民一人一人の生きている姿をはっきりと照らしていて、衰退してきているものの、住民に愛され続けている町の根強さと生命力をより引き立たせていたように思った。

また、「風が吹いている」の曲を流すのではなく住民全員がアカペラで歌うことで、歌詞とキャラの重なりをわかりやすく表現し、観客の心に直に思いを届けているように感じた。

たくさんの登場人物が個性を消さずに誰一人無駄な動きをしないので、リアルな人々の活気や息遣いを感じられて本当に素晴らしいと思った。

駅伝で走っているシーンでは、走っている方向や位置を変えて両チームの必死さと臨場感をうまく表現していて、本当に全力で走っているように見えた。

大根を栽培する上での、二つの芽を成長させていい芽だけを残す手順「間引き」と、あまねとはるねの成長とどちらか一方が残って旅館を継ぐという状況を重ね合わせて、かつて母が走った駅伝大会で勝った方が町に残るといふ真剣勝負を繰り広げる二人なりのけじめのつけ方が印象に残った。国籍も何も関係なく仲間を応援する住民の全力の声援から、誰かを思いやる気持ちのあたたかさが伝わってきた。

あまねとはるねの二人に焦点を当てつつも、周りの人々の人間関係や性格についてもわかりやすく表現されていて、この物語の主要人物それぞれの人間味や郷土への愛を感じた。

駅伝が終わり、ラストのひまわり畑での空のようなはっきりとした色の照明は、母のあたたかさや偉大さを表現しているように思った。

緞帳が下がっていくときの、はるねのひまわりの方向を向くような首の動きと視線は、自分も立派に成長したことを母に報告し、あまねのことをこの町から応援しているように感じられた。

伝統の駅伝大会を何が何でも中止にしないために高校生達が奮闘する姿や、実際に走っている中でくたくたになりながらも大根を櫛の代わりにつないでいるシーンを見て、思いを“つなぐ”ことの大変さとの住民達の絆が強く心に残った。